

Profile (プロフィール)

富田朋介

本邦に於ける古い美人画集や又現代に於ける絵画、彫刻等の美術作品を見ても人間の Profile を対照としたものは皆無と云つて過言ではなからう。反之西洋に於てはこの Profile は実に多く彫刻、絵画はおろか貨幣、切手等にまで広く利用せられているのである。

Profile なる言葉は西洋に於ては既に古くから独立して、所謂吾々が考へる “Side face” とは又別な意味合いを持つている。

元来東洋人のそれが甚だ平面的であるのに反し、西洋人の Profile は著しく立体的であり、Petrus Camper の顔側面図や西田正秋氏の東西両洋女性群の顔側面図を見ても余りの差異に驚くと共に、民族批判に大きな示唆を与へる様に思われるのである。

現代迄に人類学上民族批判の対称として人体の外観的諸形質は殆んど利用し尽されたと言つてよいが、唯 Profile が甚だ興味をそそる形質であるにも係はず、その観察は全く少ない、Profile に差異のあるのは別問題として各民族の Profile に対する観念は略共通しているとみられ、東洋に於ける仏像と古代ギリシヤ彫刻等に多くの類似点が見られるのであつて、鼻根は高く前額より鼻尖にかけて略一直線をなし、又仏像に於ける鼻尖より下顎に及ぶ Profile の線は東洋人には有り得ぬ全く理想化せられたものであり、口唇は小さく而もそれが鼻尖、下顎を結ぶ直線から大きく後退せ

られているのである。

扱而 Profile の人類学的利用がなぜ少かつたかと云うと、それは其の計測方法がなく比較基準がなかつたためと考へられる。即ち未だに定つた測定方法はなく、先きに 1857年 Deschamps 並びに Granet が大後頭孔前縁正中点 (Basion) を計測の基点として Profile の各点の前出度を測定したが、之れは生体に於ける応用は不可能であり、又 1885年 Jopinard は外後頭結節正中点 (Jnion) を基点として始めて Profile の生体計測法を提示したが遂にその報告は見られなかつた。1932年本邦に於て矢崎、大谷の両氏は前歯前突の歯科矯正法の立場から顔側面の石膏印像を作り、前額頤線なるものを考へて測定を行つたのであるが、余りにも間接法の域を脱せず、その成績は完全とはいいがたいのである。

Profile を形質とした民族批判に多くの興味を感じた筆者等 (富田, 西大条) はその計測方法を簡単にして、しかも正確に Profile の正体を把握すべく一つの方法を考案して民族批判の基礎的観察を行つて見た。即ち Profile 線上の生体計測点において、最も安定度の高い眉間正中点 Glabella (G) 及び下顎下縁正中点 Gnathion (Gn) を上下の二つの基点として、この二点を結ぶ直線を基線となし、此れに平行並びに垂直な Profile 各点間の縦計測並びに横計測を行つたのである。

計測点としては

前額部頭髪生縁正中点 Thrichior (tr.),

鼻根正中点 Nasion (n.),

前鼻点 Pronasale (Prn.),

下鼻点 Subnasale (sn.),

上口唇点 **Labrale Superius (ls.)**,
 ストミオン **Stomion (sto.)**,
 下口唇点 **Lobrale inferius (li.)**,
 頤唇溝点 **Point of sulcus mentolabialis (ml.)**,
 前頤点 **Pogonion (pg.)** の各点である。

Nasion は東洋人に於てはその決定は甚だ困難であり、荒瀬、小浜等の諸氏の例に習い基線に対する鼻鞍最凹点とした頤唇溝点、前頤点も基線に対する最突出点とした、なお実際の計測に当つては基線は仮定線となるので補助器を用いその両脚の先端を基点に当て基線と平行な実線A'を求め、此れを基準として計測に便ならしめた。

材料としては出来るだけ多くの民族、特に西洋諸民族の計測もなし得るならば甚だ興味深いのであるがそれは機会の至るを待つこととして筆者等はまず東洋民族就中日本人ならびに我々と最も関係の深い朝鮮人及び琉球人を対照とした。幸いにして1946年8月以降O刑務所に於て得たる畿内日本人1130名、朝鮮人(南鮮のみ)423名、琉球人132名の**Profile**に就き調査研究することが出来たのでその概要を多少通俗的に要約して記すことにした。

I. Profile と年齢

まず**Profile**と年齢の関係について述べて見よう。

凡そ生体の計測において重要な調査の一つは年齢的観察である、即ち諸形質の発育過程は年齢によつて各々異なる、1937年島、川崎の両氏は諸形質の変化の程度は種族によつて異なり、特に頭部諸計測においては種族の特徴ある方向において強いことを指摘している。筆者等は年齢を満20~29才、30~39才、40~49才と区分し、**Profile**が如何ような年齢的变化をなすも

のか、また民族によつて如何ような特性を示すものか検討を加へて見た。

今各民族の平均値のみを表示すれば下記の如くである。

第 1 表

	日本人	朝鮮人	琉球人	(30代)
tr — g	48.42	48.75	47.52	
g — n	17.76	18.82	18.82	
n — Prn	38.87	39.39	40.76	
Prn — Sn	6.16	6.14	6.58	
Sn — ls	15.73	15.05	15.73	
ls — sto	7.32	7.64	7.73	
sto — li	9.18	9.43	9.26	
li — ml	7.95	8.66	8.64	
ml — pg	10.87	11.76	12.59	
pg — gn	17.90	18.46	19.04	
— tr	25.88	26.50	25.84	
— n	1.60	1.87	1.56	
— Prn	25.96	26.65	25.98	
— Sn	15.96	16.20	14.99	
— ls	19.52	20.50	20.65	
— sto	15.35	16.34	16.13	
— li	21.02	22.00	21.52	
— ml	13.12	12.67	11.91	
— pg	13.21	13.12	13.02	

比較方法としては上田、高牟礼氏偏差比法を用いた、今その偏差図を示して説明すれば一般に Profile は青壮年期に於て、口唇部の縦計測を除いては、縦計測、横計測共々に年齢と共に増大するものであつて、さらにまた偏差図に見るが如く Profile を形成する各部位の中には民族により全く特異な変化を示す部位のあることに気附いた。即ち眉間鼻根間 縦計測

ないといつて過言ではない。

II. Profile 計測値の民族差

以上 Profile が年齢によつて変化し、しかも民族によつて特異な方向に変化することを知つたのであるが、しからば Profile の各計測値は民族によつてどれ程の差異があるのであろうか？次に各民族間の偏差図に就て簡単に説明してみよう。

先ず第一に述べねばならぬことは各民族間の偏差比曲線の方向に一定の特徴のあることである、即ち略々

朝鮮人——日本人の偏差図は縦計測、横計測共々に正の方向に、

琉球人——日本人の偏差図は縦計測は正、横計測は基線上に、

朝鮮人——琉球人の偏差図は縦計測は負、横計測は正の方向に、

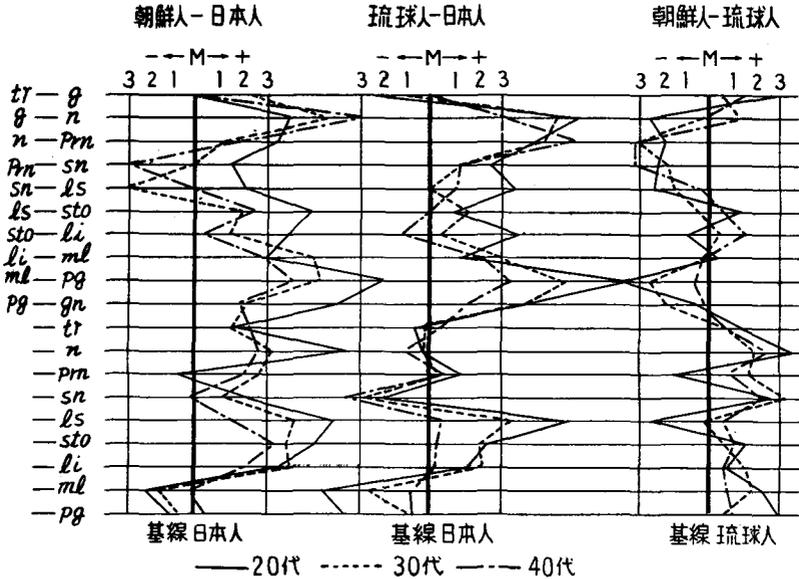
それぞれ展開するのであつて民族批判に大きな指針となるのである。

次に民族間に於て確差を示す部位を披瀝してみると

縦計測 に於て	{	日本人, 朝鮮人間 : g-n, li-ml, ml-pg, pg-gn.
		日本人, 琉球人間 : g-n, n-prn, ml-pg, pg-gn,
		朝鮮人, 琉球人間 : n-prn, ml-pg
横計測 に於て	{	日本人, 朝鮮人間 n, ls, sto, li,
		日本人, 琉球人間 sn, ls, ml,
		朝鮮人, 琉球人間 n, sn,

而してどうやら Profile に於て最も民族批判の対称となる部位は、縦計測においては眉間正中点 (g) から鼻尖 (prn) にかけての部位並びに顎頤部であり、また横計測においては鼻根、鼻底次で口唇部の横径であると考えられる。

第 3 表



III. 対顔面高比例

Lüthy に依れば顔面線の進化学的な経過は咀嚼機能の発達と相反する経過によつて特徴づけられると云ふ、つまり脳発育の強いものは顔面の突出は微弱となり、咀嚼器管は縮少されるといつた。また Petrus Camper (1750) の顔面図を見ても、それが人種の優劣を意味せぬまでも、きわめて人種批判に意義のあるものと思はれる。

各民族の Profile の観察に當つて一体それ等を構成する各部位が如何なる割合にあるものか、また若し Profile から智能部位と咀嚼部位とを区分出来るとするならば、それ等の関係を知ることは民族学的、進化学的に興味深いことと考へられる。この意味において筆者等は Profile を構成する

縦計測ならびに横計測の全顔面高（本編における全顔面高は基線に対する比例値（百倍値）を求めたのであるが、今その詳細は兎も角として概略のみを述べると、実計測値において大なるものが必ずしも大なる成績を示すとは限らないのであつてその最も著明なものは、

- イ) 前額縦計(tr-g)は実測値では朝鮮人が第一位であるが、比例値では日本人が最も大であり、而も確差を以て他民族を凌駕するのである。
- ロ) 鼻根正中点(n)から上に唇点(ls)までの縦計は朝鮮人が日本人に代つて最小の数値を示す。
- ハ) 鼻尖(prn)、鼻底(sn)の横計は日本人が朝鮮人に代つて最大値を示す。

この様に比例値を知ることによつて各民族の特性を知ることが出来る。

また最もよく発達した顔面は眉間、鼻底に於て三等分せられるといい、仏学派では眉間中点(Glabella)を以て分離点となし、下を“face”とよびさらに前額を加へたものを“Visage”とよぶが顔面に於て智能部位と咀嚼部位との明確な区分はなく筆者等は一応前者を Trichion から Glabella 迄、後者を Subnasale から Gnathion までとしてその割合を調べて見ると、はつきりとした民族的相異を示し、Fütly の言の如く、一般智能部位

第 4 表

	智能部位 %			咀嚼部位 %		
	20代	30代	40代	20代	30代	40代
日本人	26.6	26.9	27.7	38.2	38.3	38.7
朝鮮人	25.9	26.5	26.6	39.0	38.6	38.9
琉球人	24.9	25.2	25.8	39.4	39.1	38.6

と咀嚼部位とは相反の関係にあつて日本人は智能部位に於て三民族中最大値を示すのに反し、咀嚼部位は最下位であり、琉球人は日本人とは逆に前者が最下位なのに反し、後者は最大値を示すと考へられるのである。

IV. Profile の角度的觀察

東洋人の Profile が貨幣、切手は愚か映画においても taboo として禁忌とされているが、此処に Profile の角度的觀察を行つて見よう。即ち Profile の各計測点を直線にて結び、それによつて出来る角度を算定したのである、算定方法は“ $\tan\theta = \text{Profile 指数値}$ ”から該当角を求めた。角度の大小は Profile の立体観に關聯し、角度が小なればなる程その部位の屈曲性が増大する訳である。さてその成績を見ると Profile の屈曲性は年齢と共に益々増大してくることを知るのである。特に口唇部において非常に強く現われるが、個々の角度の縮小率はやはり民族によつて特徴づけられてゐる、日本人の Profile は $\angle sn$, $\angle ls$, $\angle l$, $\angle i$, $\angle ml$ はきわめて大きく、為めに口唇を中心とする下顔面は屈曲性には甚だ乏しい、朝鮮人の鼻尖角 $\angle Prn$ はきわめて特異であり、20代に於て3民族中最大角をなすのであるが、その年齢的縮小率は極端に強く、40代に於ては逆に最小となり、しかも他民族よりも5度以上も小さいのである。琉球人は鼻底より下の下顔面に於て、その屈曲性極めて高く $\angle ls$ の如きは他民族より10度も低い角度を示すのである。

V. Profile からみた各民族の親近度

筆者等は最後に型差 T. D. (Typendifferenz) の算定によつて、各民族における Profile form の親近度に就き検討してみた。公式は Poniatowski 変法を用いた。

$$T. D. = 100 \frac{(\sigma_1 + \sigma_2) (M_1 - M_2)}{\sigma_1 \sigma_2}$$

算定項目は対顔面高縦比例10種，同横比例9種，Profile 指数10種，計29種に就き各民族間の型差を求めた，今その平均値のみを示せば下表の如し。

第 5 表

T. D	朝鮮人—日本人	琉球人—日本人	朝鮮人—琉球人
対顔面高縦比例	49.43	68.05	53.05
対顔面高横比例	38.88	74.47	71.38
Profile 指数	80.11	137.01	108.41
全平均	56.73	93.83	77.83

これ等の比例指数を通じて，Profile からみた3民族の親近度は日本人（畿内）と朝鮮人（南鮮）の間に最も強く，次で朝鮮人（南鮮）と琉球人間であり，日本人（畿内）と琉球人との間の距りは最も大であることを知るのである。

以上簡単に筆者等の研究した Profile の概要を説明したのであるが，その詳細特に数字的成績は本雑誌の性質上残念ながら割愛させて頂いた。

（本学教授 生理学）